

## 実践報告書

広島県立広島皆実高等学校  
(教諭・安吉 椋子)**本実践（研究）のポイント（高校教育指導課指導主事 宮本洋子）**

本実践は、褥瘡の発生は患者に苦痛を与え、発生の要因や誘因、褥瘡の分類やステージ・好発部位を理解し、適切な看護によって予防することができることを理解し、創傷の治癒の促進及び褥瘡の予防に伴う援助について自ら学び、対象の安全・安楽を守り、主体的かつ協働的に取組む力を養う実践となっています。

生徒は、既習の知識を活用することで事例患者をイメージし、自分の考えやグループで話し合った内容を、デジタル機器を活用して共有することで、思考が深められるよう工夫されています。

## 1 はじめに

褥瘡について、「身体に加わった外力は骨と皮膚表層の間の軟部組織の血流を低下、あるいは停止させる。この状況が一定時間持続されると組織は不可逆的な阻血性障害に陥り褥瘡となる。」と定義されている（日本褥瘡学会）。褥瘡の発生は患者に苦痛を与え、疾病の治癒を阻害することになる。しかし、褥瘡発生の要因や誘因、褥瘡の分類やステージ・好発部位を理解し、適切な看護によって予防することができ、また悪化させずに治すことが可能である。看護するものは褥瘡について十分な知識をもち、褥瘡予防の重要性を理解することが大切である。

## 2 問題の所在

生徒は5年一貫看護教育制度の1年生であり、入学時より「基礎看護」「人体と看護」「看護臨地実習」等の専門科目を学習している。一学期末に生徒に実施したアンケートの結果は、授業で学んだ知識・技術から学びを深めることができた、さらに発展的に学びたいと感じているという項目に対し、クラスの9割以上があてはまると答えており、生徒は積極的に学ぶ意欲を持っている。グループワークや他者の意見を共有することで主体的かつ協働的に取り組ませたい。

## 3 具体的な取組み

- (1) 提示した事例の患者さんの情報について整理し、患者をイメージさせた。既習の知識からイメージができる患者設定とした。
- (2) 褥瘡の発生リスクについて前時までの授業で学習したことを踏まえて考えさせた。
- (3) グループで事例患者の一日・必要な援助について考えさせ、スプレッドシートで共有した。看護臨地実習に行くことができていないが、生徒自身の生活から想像できる援助を助言しながら考えさせた。
- (4) 追加の事例をあげ、援助に対して患者さんが消極的な場合の対応についてグループで考え、Jamboardへ入力し、共有した。追加の事例も生徒が以前学習した内容を活用できるものにした。
- (5) 褥瘡予防のために必要な援助と患者さんを尊重することについて考えた。倫理的課題を加えることにより、患者は一人の人として尊重しなければならないことを伝え、さらに患者を人としてイメージできる事例とした。

## 4 成果と課題

授業の中で、前時までの学習内容を想起させるとともに、生徒がイメージしやすい事例を設定し、生徒は既習の知識と技能を結び付けながら考えていた。あらかじめ個人で考え、その後根拠をもとにグループ協議を行い互いの意見から多くの気づきを得ていた。グループ協議の内容は、ICTを活用して共有することができ、生徒の発言に対しさらに生徒が質問し、思考を深めながら課題に取り組むことができた。しかし、教員の指示している内容が理解できない生徒や指示内容と違うことを行っている生徒、個人ワークの時間にグループで話をしている生徒がいた。効果的な個人ワーク・グループ協議の時間・学習課題の設定および指示の出し方など指導法の工夫が課題である。

## 5 おわりに

今回の授業では、事例患者の日常動作と褥瘡発生の要因・予防について考えさせ、次に倫理的課題を提示して学びを深めさせた。そのため、生徒は課題に対し、考えをまとめるために時間が必要であった。今後は、事前学習を工夫し、授業ではICTを活用する時間、グループワークを行う時間を明確にすることで、生徒が思考を深められるような授業作りを研究していきたい。